

ここにあった畑

中丸 道彦

玄関の前を流れる川に、蟹が戻っていた。敷石の隙間から、ハサミが見えた。下水道が整備され、生活廃水の垂れ流しがなくなったようだ。蟹も綺麗なところに住みたいのだから。昔みたいに、わざわざ海から上ってきていた。その代わりに、家の裏にあった山がなくなっていた。子どもの頃に遊んだ場所は、まっ平らになっていた。

何年も家には帰っていないかった。祖母の仏壇に線香をあげると、することがなくなった。縁側の端でビールを飲んで時間をつぶした。誰かが、縁側に出る障子戸を開けた。タバコの臭いがするので、父だろ。タバコの臭いあたりはよくなったけど、鳥が一羽もこ

ないんじゃないか。そんなことを言いながら、父は山を崩した。あとにできる建売住宅を申し込んだらしい。退職金で隠居小屋を買おうとした。家から遠くはない場所に建売は何回もあった。それをずつと見合わせてきたのに、今回は申し込んだ。切り崩した裏山には、祖母の畑があったからだと思つた。

横須賀の港町で育つた。平地の少ない土地だった。山肌は防空壕だらけだった。よく中に入って遊んだが、落石が危ないという理由で埋められてしまった。そんな山が入り江の

先まで伸びていた。  
山は格好の遊び場だった。盆踊りなどのイベントがあつたときは、肝試しをした。夏休みには遠出もした。昼ごはんを早めに食べて、岬に集合する。高射砲陣地の跡地まで上り、そこから山に入った。山伝いに歩いて、近隣の町に下りた。町と言っても、田んぼや沼地ばかりだった。そこで、カエルやザリガニを捕まえた。夕方になる前に、また山に入り、今後は別の道を通って帰ってくる。帰り道の途中には、祖母の畑があつた。ケモノ道を歩き続けると、急に道が開ける。そこが畑だった。前かがみになって動いている祖母の小さな影を見つけると、ようやく帰ってこれた。安心した。畑まで来れば、山を下りる出口はすぐだった。出口は、裏庭に続いていた。そんな少年時代を終えて、十九歳のときに東京にでた。田舎も、そこで暮らす人々も、嫌いだつた。  
東京で四回目の夏を迎えたときに、祖母が死んだ。具合が悪くなつてから、三カ月で往生した。「おばあちゃんの様子がおかしい」と母がいくら言っても、「そんなことはない。いつもどおりだ」と父は言い張つたらしい。母は、父の姉に相談した。様子を見に来た叔母が、すぐに救急車を呼んだ。その日のうちに入院した。脳こうそくだった。後で聞いた話だが、祖母は倒れる前日にパーマをかけたらしい。老人会のお楽しみ会があつたようだ。祖母の通夜には遠い親戚も集まつた。はじ

めて見る顔も多かった。夜が更けるまで話を  
していた。葬式の料理も、全部用意してくれる  
店があるけど、昔は近所でも大変だった。  
「話は、昔のことへと遡っていった。  
「おばあちゃん大変だったろうね。おじいち  
やんが死んでから水道まで止めたんだから」  
「水道代がもつた。水道まで止めたら、それから  
毎日、山の井戸まで水を汲みにいったのよ。  
「あんな小さな体で」  
「畑を作りはじめたのも、その頃からかね」  
「夜遅くに、横浜の祖母が訪れた。母の母、  
私にとつては、もう一人の祖母である。ゆっ  
くり丁寧に線香をあげた。遺影の前に長く座  
つていたあと、一旦は帰っていった。  
「葬式は盛大にやった。お経が終わっても弔  
問客が途絶えなかった。結構な年まで生きた  
ので、誰も悲しまなかった。葬儀屋の進行係  
が父に「何やら耳打ちをした。霊柩車が来たよ  
うだ。祖母に「わいがられた若い男たちが、  
お棺を国道まで運んだ。  
「棺桶を家から出すときに、それまで隅っこ  
で静かにしていた横浜の祖母が、泣き崩れた。  
「あんな苦労したろうね。亭主兵隊にとられ  
て、女子どもだけ残されて」  
「おつとりとして控えめな祖母から、あんな  
大きな声が出た。ことが信じられなかった。  
お棺を持つたまま、動けなかった。裏庭で

鳴く、鳥の声だけが聞こえた。

父から新居祝いの召集をかけられた。還暦祝いのときは無視したが、今回は出ることにした。親戚も集めて盛大にやった。食べきれないほどの料理が並べられていた。遠くタバコを吸いに庭に出た。まだ残っている。遠く山には夕日が沈んでいた。父も庭に出てきた。並んでタバコを吸った。覚えてきた。ここにあればあちゃんの畑があったの、覚えてるか。返事をする代わりに、うなずいた。